

## 総合的な学習と教科の学習

Integrated Learnings and Subject

辻田 嘉邦（芸術系教育講座）

シンポジウムの進行をつとめた関係で、総合的な学習と教科教育について、そのまとめを記述するのが本来の役目なのだが、かなり自由な立場で司会者の見解を述べることにしたい。

なぜなら、パネラー諸氏の話聞き、総合的な学習を巡る思いが彷彿と湧き、自分に向けての提言と受け止めたからである。

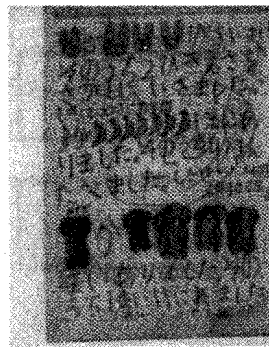
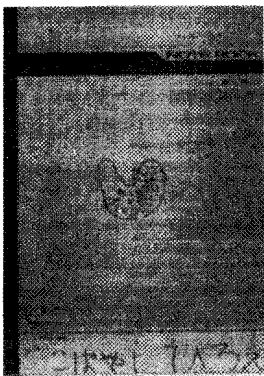
ただ、その私的な見解の要旨とするところは、ある小学生のノートへの思いと総合的な学習の発想、それに教科教育、なかでも美術教育との関係についてである。

リアクトな発想 レスポンシヴな発想 イントラとインターディシプリンの豊かな共生

### (1) ねこちゃんノート

小学校1年生を担当する、ある先生は子どもたちのノートを1冊だけにして国語も算数も音楽も、みんなこの1冊のノートに書こうと提案した。

ノートの表紙には、子どもたちの好きなものの名前をつけ「ねこちゃんノート」とか「ウルトラマンノート」と命名して、思い思いの絵をかいて飾った。



この先生の話を知ると、1年生の子どもの学習は、まるごとで、教科の区切りは不自然だと言われる。「ねこちゃんノート」を拝見すると、先生の話される事がなるほどうなずける。算数の学習と思われるノートのページを開くと、文字あり、絵あり、数式ありで生き生きとした学びの様子が目に浮かぶ。

それだけではない。ノートを繰っていくと空き容器の回収を手伝った記録があり、リサイクルから始まって地球資源の保護にまで及ぶ1年生の願

いが1年生らしいアイデアで提案されていた。

学校のこと家庭や地域での出来事、猫や小鳥の話などがノートの中で、ごちゃ混ぜになっているが、「ねこちゃんノート」は実に面白い。国語や算数の形式的なノートの味気なさとは違い、子どもの生き方や学び方が熱っぽく伝わってくるのではないかと。

先ず、パネラー諸氏の提言から思い浮べたのが、「ねこちゃんノート」である。それは、総合的な学習によって子どもの学びがより生き生きさを取り戻し、断片化や形式化した学習に改革をもたらす可能性を感じ取ったからである。

また、そこで論じられた横断と総合は、単に教科間の合科ではなく学習の主体である子どもの中で実現されることを目指すところに意義が捉えられているからである。

### (2) 総合的な学習の発想

今日、総合的な学習への関心が高まり、週の時間割りの枠に組み込まれ実施されようとしている。

総合的な学習 の授業時数	小学校		中学校	
	3・4年	105	1年	70~100
5・6年	110	2年	70~105	
		3年	70~130	

学習指導要領に示された1単位時間は、小学校が45分で中学校が50分と教科に匹敵し、それを勝る授業時数を配当している。

取扱いの事項をみると、それぞれの学校や地域の実態、独自性を生かした実践を期待してはいるが、一方では、例えばとして国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的、総合的な課題を課すことが目指されている。

そこでの学習のあり方としては、体験学習や地域の教科力の活用、教科間を横断し縦断して探求し、行動化する子どもの活動を構想しているかにも見える。

これは、教科に対する子どもの興味、関心、意欲などの喚起や反応を促してきたリアクトな発想とは異なり、先程の「ねこちゃんノート」にみてきたような、子どもが主体となるレスポンスな学びの発想である。

ただ、ここで理由1年生しなければならないこととして、「ねこちゃんノート」の実践と総合的な学習の仕組みを比較し、その相違点を先定めておかなければならないであろう。

なぜなら、「ねこちゃんノート」の実践は、確かに子どもの学習をまるごとで捉えているが、このまるごとに見える総合は、やがて教科の学習へと分化し、発展する仕組みで、小学校低学年の生活科が中学年以降、社会科や理科などに組み込まれるのに似ている。

それに対して、今日提案されている総合的な学習は、教科学習の枠組みと総合的な学習を併置する発想（イントラとインターディシプリンの豊かな共生）で、相互に関連し合い、同時進行する並列型の仕組みである。

子どものノートに戻すと、「ねこちゃんノート」はやがて消滅し、いずれかの教科のノートとなるが、総合的な学習では、「ねこちゃんノート」の消滅はなく、各教科のノートと一緒に存続するのである。

だが、教科ノートは味気なく「ねこちゃんノート」に及ぶものでないことを前述してきた。もしかすると、味気ないノートと一緒にすると「ねこちゃんノート」もつまらなくなるのではないかと危惧したくなる。

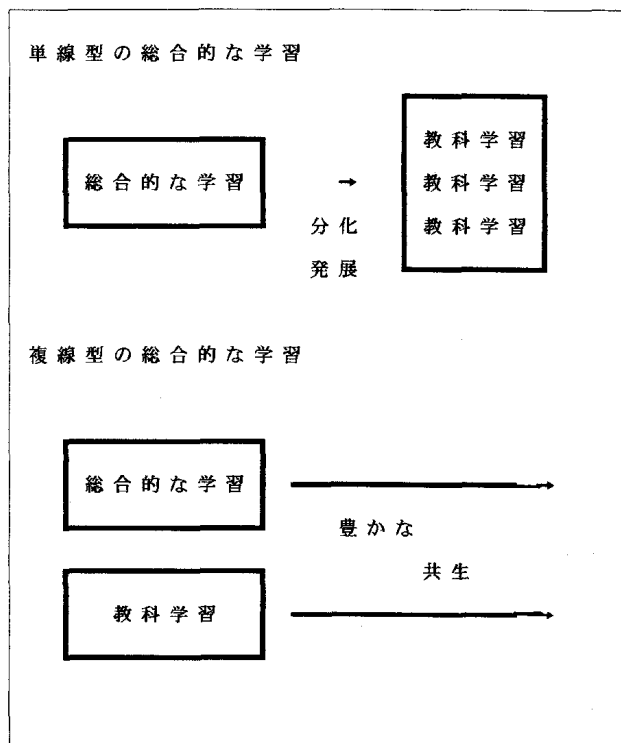
しかし、その逆もあり、「ねこちゃんノート」が加わることによって教科のノートもよみがえり、魅力的になる場合もあるだろう。

実は、教科学習と総合的な学習を併置するカリキュラムの編成には、味気なくなった教科学習に子どものレスポンスな学びを再起させる意図が

込められている。

つまり、総合的な学習を併置することで教科の学習も質的転換が求められ、課題解決の場や探求の過程を子どもの学びに開く新学力観（生きる力の養成）に基づく実践の展開が不可欠であることを見失ってはならないのである。

このような教科学習と総合的な学習によるイントラとインターディシプリンの豊かな共生がシンボジウムで熟っぽく論議され、まとまりをもって整理されたのではなかろうか。また、このイントラとインターディシプリンの共生によって、それまで縦列に配置されていた各教科の並びが改められ、円環状に向かい合い、総合的な学習の囲みを横断し、縦断する新たな教科間の共生ももたらすものと期待が込められた。



### (3)美術教育との関係・関連

では、美術の学習とは、どのような関連や関係で総合的な学習の発想や仕組みを捉えるとよいかをみてみよう。

そのためには、美術教育にも、味気ない学習があることを、先ず直視しなければならないであろう。

美術教育の味気ない学習とは、陳腐な美術領域に縛られたり、旧態依然とした題材の基に画一的な指導を行い美術嫌いを増幅する実践ではなかろうか。また、美術教育の理解に乏しかったり、軽視したり

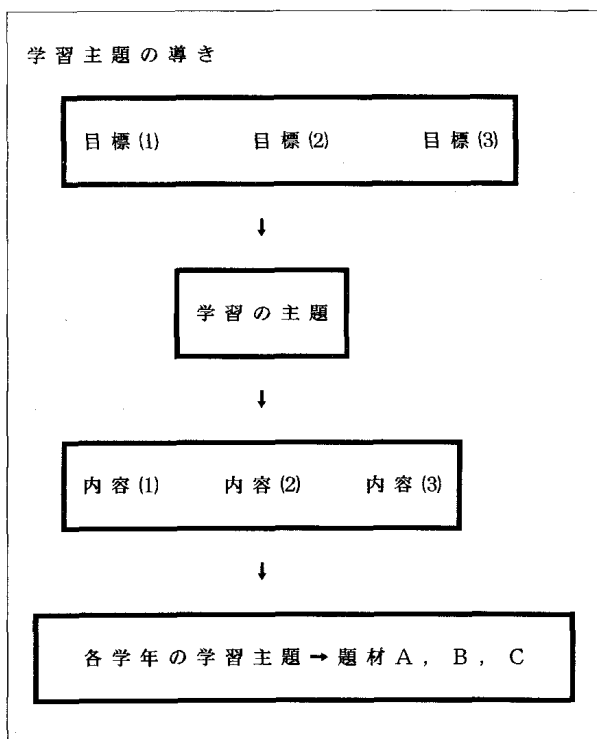
して、でたらめと放任に陥った実践もそれで、子どもたちは美術の楽しさや魅力を感じなかったと言う。

このような図工や美術科の味気ない学習を野放しのままにしているのは、望ましい総合的な学習との関係や関連は成立しない。

しかし、総合的な学習の導入によって図画工作や美術科の時間数が削減される現状を憂い、いよいよ以て美術教育を狭く捉え、ミニマムエッセンシャルズな知識や技術の指導に落しめたり、いよいよ以て、美術教育を不必要にするような味気ない状況が予想される。このような事態が最も危険で先程述べた教科学習と総合的な学習の豊かな共生を阻害するだけでなく、将来の美術教育にとっても発展が望めなくなるといっても過言ではあるまい。

従って、総合的な学習との関係を望ましいものにするためには、教科の学習を時間の減少に関係なくゆとりを持たせ、味気なさを払拭することが基盤になる。

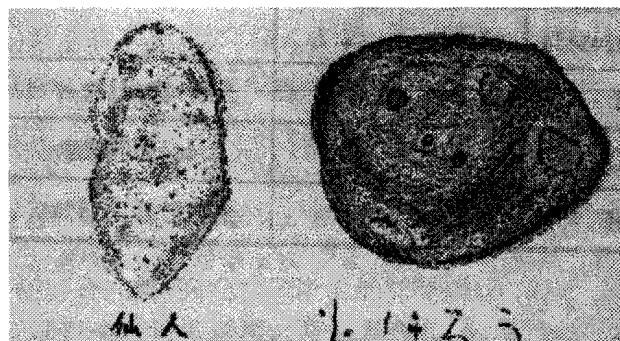
その視点、あるいは方法として、美術教育の学習における子どものレスポンスな学びを筋道立てることが大切である。それには、子どもの造形や美術への関わりや期待、意欲などを見定め、そこから子どもの学習に対する主題を導き、それを括りにした題材の統合や選択を行なえるようにしたい。



美術教育においては、子どもの学習に対する主題には、材料や場所、環境に関わるメディアとしての学習主題、身体感覚や技法といったコード的な学習主題、それに、イメージに関わった学習主題が想定でき、学年に応じた「材料の形や色の見立て遊び」とか「かきたいもの、つくりたいもの、なあと」といった学習主題で、学習内容を捉え、題材を選択したり開発して括ることができる。

要するに、美術教育の学習で、子どもが自分の思いを色や形に込め、その表現の意味や方法を自ら編み出して探求的、行動的、創造的に取り組める学習の場を創造することが先決となる。

その上に立って、総合的な学習の場でも美術表現を核にした横断的、総合的なクロス・カリキュラムを学校や地域の子どもの興味や関心に基づく課題、さらには、国際理解、情報、環境などの課題を対象に編成し、実践を展開する場を疎かにしてはならないであろう。なぜかといえば、これらの総合的な学習の対象とする課題は、美術教育と深く関わる内容で、美や創造を抜きにしては解決が図れないからである。



草花の色や形の美しさ、不思議さに驚く子どもの目や心から地球環境の保護を捉える総合的な学習が大切であるし、身近な看板や目印、手話などから情報の学習の実りが期待できるのである。

国際理解を課題にしたグローバルな学習で、じゃがいもの写生（異文化理解）や材料をあえて不平等

に与えるモビールづくり（資源の活用）を核にした実践を見たことがあるが、そこでの造形活動は決して総合的な学習の手段にとどまらず美術表現にもユニークな表現の広がりをもたらしていた。

シンポジウムの進行につれ、このような教科学習と総合的な学習の豊かな共生の関係や関連を生かした美術教育の新たな実践展開を開拓してみたいと思いを馳せてみたのである。

最後に、このような観点から新学習指導要領の「総合的な学習の時間の取扱い」で、留意しなければならないイントラとインターディシプリンの関係、関連について言及し、私的なシンポジウムのまとめを終えることにしよう。

#### ○総合的な学習のねらいについて

総合的な学習の時間においては、各学校は、地域や学校、児童生徒の実態等に応じて横断的、総合的な学習や児童生徒の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行なうものとする。

横断的、総合的な学習だが、教科間の合科といった発想ではなく、子どもが必要に応じて各教科を横断し、総合して学習を進めるものでなければならない。だから、子どもの興味や関心に基づく学習の取り組みの場が重要になり、子どもの創意工夫を生かすことが総合的な学習の基本となるのである。

この子どもの創意工夫は、美術の学習で培われた豊かな感性や発想、構想の能力を存分に発揮する場で、子どもらしい課題の発見やアイデアを生み出すのである。

そのためには、単に総合的な学習でも絵をかき、ものを作るから関連するといった狭い範囲や手段的な捉え方に陥らないよう留意しなければならないのである。

従って、「自ら課題を見付け」とか、「主体的、創造的に取り組む態度」といった総合的な学習のねらいとの関連を押さえることが最も大切な視点となることを理解しておきたい。

パネラーの一人が、「子どもならではの知」を創造する総合的な学習の活動では、「表現」を中核に据えたカリキュラムを構想する必要があると説いていた論点にあたるであろう。

#### ○総合的な学習の課題について

各学校においては、ねらいを踏まえ、例えば国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的、総合的な課題、児童生徒の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題などについて、学校の実態に応じた学習活動を行なうものとする。

美術教育と総合的な学習の横断的、総合的な課題は、かなり関連するところが多い。なかでも、国際理解、情報、環境の課題は、美術の特性である色や形による表現が、世界共通の伝達手段であり、国際理解や情報で欠かすことのできないものである。

また、材料や場所から発想する造形や美術の特性も環境を学ぶとき有効な課題解決の拠り所となる。つまり、総合的な学習の課題を子どもにとって、興味や関心のあるものに、具体的で身近なものにするには、美術の表現や伝達の楽しさを中核に据えて扱われることが望まれるのである。

一方、総合的な学習の課題と関連した美術教育の新たな題材や表現の広がりを開拓していかなければならないであろう。

いずれにせよ、総合的な学習と美術教育の関連は学習の主体である子どもの活動の中で横断し、総合することを目指したいものである。

#### ○総合的な学習の配慮点について

自然体験やボランティア活動などの社会体験、観察・実験、見学や調査、ものづくりや生産活動などの体験的な学習、問題解決的な学習を積極的に取り入れること。

体験的な学習、問題解決的な学習を取り入れるとき、美術教育で培ったものを作り出す創造的な技能が発揮されなければ、子どもにとって、意味ある学習への発展が期待できない。また、体験的な学習や問題解決学習を通して学んだ総合的な学習の成果は、美術教育の表現や鑑賞の活動に生かし、子どもたちのレスポンス的な学習の実りを生み出すように留意したいものである。

★ 子供は成長し、変化する。学校の規則は何年も同じではいけない。子供の世界には流行もある。流行の魅力は、子供の方が大人より何倍も強く感ずる。

石川達三